

「排情主義」から「活情主義」へ

-「教育における感情」再考-



<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/>

1

- 国立教育政策研究所・プロジェクト研究
- 非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-2-1_a.pdf
- 社会情緒的コンピテンス調査に係る分析結果報告書
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h30/h300327-01.pdf

2

2

『社会情緒的コンピテンス調査に係る分析結果報告書』

- 自尊心
- 自律的学習動機づけ・エンゲージメント
- 教師・友人との関係性(アタッチメント)と向社会性・他者への尊敬
- well-being(幸福感)・抑うつ気分
- 学校行事・課外活動への取り組みと社会情緒的コンピテンスの関連
- 所属学級・教師との関連および家庭の状況の要因
- 関東圏の2つの自治体の小・中・高・計35校・330学級の児童生徒とその保護者・担任教諭
小学校15校の4・5年生 95学級 3,066名
中学校11校の1・2年生 92学級 3,089名
高等学校9校の1・2年生 143学級 5,585名

3

3

国立教育政策研究所・プロジェクト研究

- 教員の配置等に関する教育政策の実証に関する研究【平成28～令和4年度】
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r05/r050425-06_honbun.pdf
- 社会情緒的(非認知)能力の発達と環境に関する研究:教育と学校改善への活用可能性の視点から【令和2年度～令和5年度】
https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf3/2021_hattatsu_a.pdf

4

4

- 「ライナスの安心毛布」が研究の出発点
→子どもの個性が生じる仕組み・親子関係に関心
- 子どもが最もよく育つのは「ほどよい関係」の中
- 子育て・子育てに「たった一つの理想型」はない
- なぜならば、子どもも子どもに関わる大人もみんな、元来、一人ひとり違うから、それぞれの子どもと大人が置かれた生活状況も異なるから
- 「基本」をおさえて、あとは一人ひとり高度に個性的な子どもに教えてもらいながら、また自分の個性を活かしながら、さらに自分たちが置かれた状況を現実的に見据えながら、「それぞれの形」を創っていくべきもの
- 「基本」の一つ＝アタッチメント

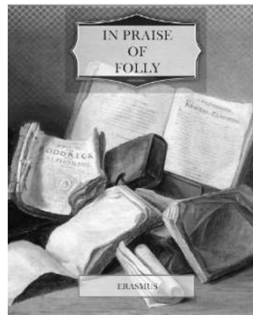
5

5

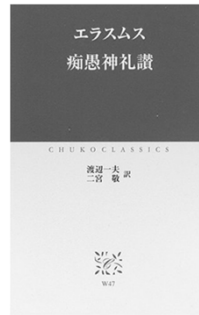
- なぜ「感情」に刮目する必要があるのか？
- ヒトは元来“Homo Economicus”(経済人)ではなく“Homo Emoticus”(感情人)である
- 私たちの日常は実に様々な感情にまみれている
- シンギュラリティが迫る中、AIが崩せない最後の牙城
- にもかかわらず科学(心理学)は不当にも長く感情に対する注視を怠ってきた(→「行動主義」:<心>を問わない心理学)
- 感情は人の心の“dark side”
人を「愚」に走らせる(→「七つの大罪」:憤怒・嫉妬・傲慢・怠惰・色欲・貪食・強欲)
- しかし、本当にそうか？(→進化的見方の台頭)
- 感情的「痴愚」の中にこそ幸福と合理性が潜む
- とりわけ感情は人の社会性を高度に支えている

6

6



Erasmus, D. (1511/2011). *In Praise of Folly*. Createspace.



エラスムス(著), 渡辺一夫・二宮 敬(訳)
(2006). 痴愚神礼讃. 中公クラシックス.

痴愚神モリアの言説：「情が人に幸をもたらす」

種々の感情に駆られた一見愚行と思いきふるまい
の中にこそ、人にとっての真なる幸福や徳がある

7

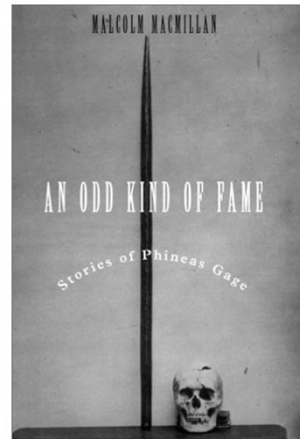
7

もし、感情がなかったら

8

8

- Phineas Gage
- 1848年: 鉄道敷設工事中に事故に遭う
- 鉄棒が前頭葉貫通
(特に前頭前腹内側部・眼窩前頭皮質等に損傷)
- 劇的な回復
- 知的側面: 変化少
- 感覚運動: 変化少
- 人格感情: 変化大
非礼・下品・場当たり・
衝動的・怒りやすさ
気分の変わりやすさ・優柔不断
日常的決定や計画に大きな問題



MacMillan, M. (2000). *Odd kind of fame: Stories of Phineas Gage*.
Bradford Books

9

9

- ダマジオ, A.: ゲージと同様の患者群に着目

感情の障害+衝動性+計画に対する無頓着
IQに落ち込みはない症例も少なからず存在
認知機能を保持しながらも社会生活に難
エリオットの症例: アイオナ・ギャンブルゲーム

- 感情は物事の計画や意思決定に不可欠

感情は理性と対立するものではない
感情は思考や意思決定をガイドし、統御する
感情は思考の足りないところを補う

10

10

『ソマティック・マーカー仮説』

感情は「アンブ」
出来事の意味を増幅して身体・脳・
心に定着させる
学習促進・定着機能

知っていても感じなければ適切な行
動はとれない

感情が理性的な判断や意思決定の
素地をなす

「身体に刻まれた印」が、当該事象
と類似の状況に遭遇した際に、「直
感」(gut feeling)として甦り、判
断・意思決定や行動を導く

11

11

社会性こそがヒトの強み

12

12

- ヒトは「狩る人」だったか「狩られる人」だったか？
- 脆弱で脂肪が多い→他の動物の恰好の餌食
- 想定される食べられないための進化のシナリオ
→強さを身につければいい
(闘争と逃走の能力獲得:キバ・ツメ・速い足等)
- でも実際はヒトはますます弱くなるよう進化した
→ヒトの進化の逆説
- **なぜ???**

13

13

- ヒトの身体的な弱さは「子どもっぽさ」に起因
- ヒトは大人でも「子どもっぽい」
→「自己家畜化」/「幼形進化」(幼形成熟)
- 「子どもの身体」より「子どもの心」が重要だった
- 「子どもっぽい心」
=素直に他者を信頼し仲良くじゃれ合える心
猜疑心や攻撃性の少なさ
→他者との関係を作り群れをなす上で有利
- 単体としての強さよりも集団としての強さを選択

14

14

- 「子どもっぽい心」の強み→群れをなす力
ヒトは一人一人は弱くとも、群れになると俄然、強い
- ヒト本来の集団規模150人(Dunbar数)？
- 集団規模と大脳皮質(+子ども期の長さ)の相関
→社会脳仮説 (“vocal grooming”仮説 ; “gaze grooming”仮説)
- 「内なる目」(意識/自己意識)・「心の理論」(mentalization)
互惠性・道徳性・社会的規範・宗教 etc.
+火の使用→時間収支の効率化→「認知的贅沢」
- 血縁的な絆・非血縁型集団的な凝集性/共同性
→社会性こそが強み:社会性の確立と維持に関わる
心の進化と社会化の仕組み→ヒト固有の特質

15

15

「性善説」か「性悪説」か？



マイケル・トマセロ (2013).
『ヒトはなぜ協力するのか』勁草書房

- ヒトは、「見境なく」助けるよう生まれつき、選択的に助け、時に欺くよう社会化される
- 「志向性の共有」
- 「私たち志向性」
- 互惠性・社会的規範
- 集団同調の両刃性
- 内集団ひいき
- 外集団ぎらい

16

16



- ヒトの赤ちゃん
- 「ずる」をきれい、「公平」「公正」を当たり前のことと考える
- 意地悪をきれい、親切を好む
- 悪いことをした人を罰することを好む

ポール・ブルーム (2015).
『ジャスト・ベイビー』NTT出版

17

17



NTT出版
ヨハイ・ペンクラール (2013).
『協力がつくる社会』NTT出版



- 人間の「群れ」の本質
私欲だけに起因しない
- 反『リヴァイアサン』
△権力による統制
- 反『国富論』
△「見えざる手」調整
- 「ペンギン」としての人
- 少なくとも部分的には
無私・公利の「協力」に
よって支えられる社会

18

18

社会性を紡ぐ感情

19

19

社会的感情の機能性・合理性

- ある種の感情は人間関係の中で、しばしば、一見、非合理的な選択や行動に人を縛り付ける
- 「オデッセウスの鎖」: コミットメントとしての感情
- 最後通牒ゲーム・公共財ゲームにおける経済的非合理性(→互惠性遵守・利他的懲罰)
- 囚人のジレンマ状況における「反」ナッシュ均衡
- 近世日本・コルシカ島等の仇討ちに纏わる感情
- 社会的感情の要約→「黄金律」(愛と返報性)?

etc. 20

20

- 怒り・義憤の社会的調整機能
- A家の庭に、B家の犬が侵入し、たびたび庭を荒らす。ついには、自慢の盆栽をめちやくちやに。A家はB家に弁償代として10万円要求。しかしB家は犬のやったこととして取り合わない。A家は裁判を考えるが、その費用には10万円かかる。さて、あなたがA家の人だったら、こんな時、どうするか。

21

21

- 人のいい友だちが、あなたがひどくお腹が空いていることを察して、自分のお弁当からたくさんおかずやらご飯を分けてくれるとする。見ると、その人の弁当箱は見る見るうちに半分近くにまで減っているではないか。それでも、あなたはいくらでもその人の厚意に甘えようとするだろうか。大概の人は、そこで「もらいすぎてしまった、すまない」と罪悪感を感じ、たとえまだお腹が満たされていなくとも「もういいよ、お腹いっぱい」と言うのではないだろうか（まだまだとれそうなのに、自分の利益に自ら歯止めをかけてしまう）。[→許し(forgiveness)]

22

22

- また、お弁当のほぼ半分を食べ尽くしてしまったあなたは罪悪感とともに、心底「ありがとう」という感謝の気持ちを感じるに違いない。そしてお小遣いをためて今度必ずお返ししようとする（自分の利益をすり減らす）。
- しかし、そんな時に、彼のバックの中に今の弁当箱の2倍もありそうなもう1つの弁当箱を見つけたとしたらどうだろう。感謝の気持ちがなくなることはなくとも、幾分その程度は低くなるのではないだろうか（自他の利害のバランスに敏感に反応: cf. 最後通牒ゲーム）。

23

23

「最後通牒ゲーム」

- 2人に100ドルの提供
- 2人は別々の部屋にいて、情報交換できない
- コイン投げで一方が「提案者」に、他方が「回答者」になる
- 「提案者」は2人の間の分配額をいくらにするか、1回だけ提案: 「回答者」はその提案に対してYesかNoか、1回だけ回答
- Yes → 2人とも提案通りにお金を手にできる
- No → 2人ともお金をまったくもらえない
- さて、あなたが提案者ならどう提案するか? ²⁴

24

- 純粋に経済的合理性の観点からすれば、「私が99ドル、あなた1ドル」という提案をされても、回答者は、「いいよ」と言えば1ドルの利益が確実に得られる訳なので、合理的なはず
- しかし、そうした提案をする提案者は殆どいない→大概、限りなく半々に近い提案をする
- そんな不公平な提案をしたら相手は怒るに違いない→「いやだ」と言われたら、両方とも全く儲けが得られずに損してしまう→それはこわい→そんなことになるくらいなら半々が一番いいかも→相手も納得してくれるはず……

25

25

公共財ゲーム(Public Good Game) ①

- ここに4名のプレーヤーがいて、それぞれ100万ずつお金を持っている。各プレーヤーはそれをそのまま自宅に持ち帰ることもできるが、ある賭けをすることによってもっと多くの金額を入手することもできる。その賭けとは、もし参加者の一人が、自分の持っているお金から、いくらかを賭け金入れの「銀行」に入金すると、その銀行は、その入金した額の2倍を平等の割合で4人の参加者すべてに分け与えるというものである。もし、すべてのプレーヤー全員が100万を銀行に入金すると、銀行はその総額400万の2倍、すなわち800万を等しく4等分して、200万ずつ各プレーヤーに分け与えるという訳である。つまり、この賭けでは、プレーヤー全員ができる限り多くの金額を銀行に入金することが、この4人のグループにとって明白な利益となることになる。さて、もしあなたがこの4人のプレーヤーの一人だとしたら、どのようにふるまうだろうか。

Fehr, E. & Gächter, S. (2002). Altruistic punishment in humans. *Nature*, 415: 137-140.

26

26

- 3人が100万を銀行に入れ、1人がそのまま100万を懐に抱え込んでいたら、 $300 \times 2 = 600$ 万が4等分され、1人あたり150万手にすることになるが、この場合、銀行に入金しなかった1人は $100 + 150 = 250$ 万を手にするということになる。
- 2人だけが100万を銀行に入れ、2人がそのまま100万を懐に抱え込んでいたら、 $200 \times 2 = 400$ 万が4等分され、1人あたり100万手にすることになるが、この場合、銀行に入金した2人は辛うじて元金100万を取り戻すことになる。だが、入金しなかった2人は逆に $100 + 100 = 200$ 万を手にするということになる。
- 1人だけが100万を銀行に入れ、3人がそのまま100万を懐に抱え込んでいたら、 $100 \times 2 = 200$ 万が4等分され、1人あたり50万手にすることになるが、この場合、銀行に入金した1人のもとには結果的に50万しか残らないことになる。だが、入金しなかった3人は逆に $100 + 50 = 150$ 万を手にするということになる。

→「正直者がバカを見る」構造：ゲームからの離脱者が絶えない

27

27

公共財ゲーム(Public Good Game) ②

- 上と同じ賭けだが、共通の賭け金入れの銀行にお金を入金しなかった者を罰することができるとしたらどうするか。その罰とは、入金しなかった者に、100万のうちの15万円の罰金を科すというものであるが、その罰金は、特に入金した他のプレーヤーに配分される訳ではない。それどころか、入金拒否者を罰することを選択したプレーヤーも、実験リーダーに5万を支払わなくてはならない。
- 多くの人がゲームに参加し続ける：人は自身が被害に遭っていなくとも、「正直者がバカを見る」状況に耐えられない(義憤)→たとえ自身が利益を得られなくとも、また却って損を被っても、不正者を罰したいと思う
→「利他的懲罰」 (共同罰の仕組み→警察・マルサ等)

28

28

A	K	4	7
---	---	---	---

アルファベットの裏には数字
「母音の裏側は偶数である」

29

25	17	有	無
----	----	---	---

「20年以上勤続すれば年金がもらえる」
従業員立場で
雇用主立場で

裏切り者検出（社会的契約）モジュール

30

社会的感情 (social emotion)

- ヒトの個としての適応性は、ほとんどの場合、人間関係や集団への適応を通してもたらされる
- ヒトの本源的な社会性→社会的構造の安定化・互恵的利他性(協調性)を支える感情の進化
- 社会的問題の多くは「今・ここ」では解決されない
→長期的な適応戦略:「急がば回れ」
「今の損が明日の得に」
- 「改悛型しっぺ返し」戦略に適った感情の原理
(寛大型しっぺ返し)

31

31

「神の見えざる手」とは種々の社会的感情!?
「感情とは社会という織物を編み合わせる糸」

自己利益の最大化のみを行動動機とする「経済人」
(Homo Economicus)は「合理的な愚か者」

→人は本源的に「感情人」(Homo Emoticus)か?

32

32

両刃の剣としての感情

33

33

感情のパラドキシカルな性質

- **両刃性**:感情の合理性 / 非合理性は表裏一体
- 「感情には機能する場合と機能しない場合がある」というよりも「感情とは機能(合理)的である時に同時に反機能(非合理)的でもある」
 - ①強引な割り込み→当該事象優先
 - ②“One size fits all” の原理
 - ③“well-being”と“fitness”:短期的 vs. 長期的視座
 - ④感情は本源的に“Kluge”
 - ⑤進化的適応環境(EEA)と現代的環境の齟齬

34

34

- **感情の両刃性**:感情はうまく使えばとても有効
使い方を誤ると大ケガをする
- e.g. 怒りではなく怒れない病理としての「キレル」
「キレル」→時機と対象と方法を間違えた怒り
- アリストテレス:時機と対象と方法をわきまえた正当な怒りはほとんどの場合、機能的
- Averill:怒りの「報復」と「和解」の表裏一体的機能性
- Russell:「妬みは民主主義の礎」
他者との利害バランスの是正と自己向上的動機 etc.

35

35

感情の逆説的二重性

Emotion as Regulator

vs.

Emotion as Regulatee

“Regulation of Regulator”

Voluntary regulation of involuntary regulator

36

36

• “*Regulation of Regulator*”

Voluntary regulation of involuntary regulator

- 感情そのもののただ抑制に通じるRegulationが暗に、長く心理学の中では是とされてきた
- 本来、模索されるべきはRegulatorとしての感情の適応的機能を最大化するRegulation

37

37

教育における感情の位置づけ

38

38

Passion vs. Reason

Heart vs. Mind

プラトン→人の魂は悍馬と賢馬に引かれる馬車
ストア哲学(stoicism) → “ストイック” (stoic)な生・感情からの解放を説く
→ カトリックにおける7つの大罪

「感情」と「認知」の対立的構図: 「認知」の優位性
→ 「教育」も含めた西欧思潮における通奏低音

39

39

教育における 主「知」主義・重「理」主義 排「情」主義

制御・管理されるべきものとしての感情
「感情的でないことが適応的」

情の世界から離脱し理の世界に参入すること
があるべき発達であり、それを促すのが教育

40

40

- しかし、近年の感情研究の流れの中ではむしろ「機能的・合理的感情観」が主流
 - ネオ・ダーウィニアン的感情観の台頭
 - 制御・調整するもの(**regulator**)としての感情
 - 現時現空間においては、一見、非合理的かつ破壊的な、あるいは意識上では多分に嫌忌的な感情が実は高度に結果的(長期的 / total life)・生態学的・進化論的適応価を有する
- 「感情の賢さ」(感情に潜む知性・機能)への刮目

41

41

- 教育の研究や実践の上で感情はきわめて厄介
- 感情は顕在的でも移ろいやすく捉えがたい
方法論の壁: 殊にreal timeでの測定は困難
- 感情は神出鬼没で見通しが立ちにくい
予測困難の壁: 殊に集団内力動は読めない
- 感情は制し得てもその生起や強度は操りにくい
操作困難の壁: effortfulな営為になじまない?
- “More is better” の原理に元来、適わない
- “Moderate is best”の具現することの難しさ
→この原理的困難性をいかに超克し得るか?

42

42

- 教育における感情を再考する
- 教育の現場→本質的に、複数成員間で多様な感情が色濃く、かつ力動的に交錯するところ
- が、教育学や心理学が「教育における感情」について、どれだけ真摯な考究をなしてきたか?
- 辛うじて問題にしてきたところがあるとすれば感情の負の側面→学びを阻害するものとしての感情・逸脱行動に駆り立てるものとしての感情・心身の病を生み出すものとしての感情……
- が、感情には学びや発達を促す正の側面も!
- 感情の管理のみならずその機能の最適化を!

43

43

教育における感情の潜在的役割

- **destructor/disorganizer/distracter**
regulatee
- **constructor/organizer/motivator**
regulator
- **background/climate/culture**
releaser/primer

44

44

「認知」信仰の揺らぎ

45

45

根強かった「認知=IQ」信仰

- 『**The Bell Curve**』 (1994)
- 人の社会的成功におけるIQの役割を再確認
- 成育家庭の富裕さよりもIQの予測力が大きい
- IQの遺伝的規定性の高さ
- IQに従った社会的階層の形成・固定化
- 「遺伝的ポテンシャルに乏しい」貧困層の子どもおよび家庭に補償教育・福祉措置の「無駄」
- 貧困層中心の福祉は「遺伝的にIQの低い」人口の増加を招来→国全体のIQ平均値の低下
- 大きな物議を醸す：イデオロギー的反発

46

46

- 『**Emotional Intelligence**』 (1995)
- 感情知性(EI)こそが幸福や適応性の枢要な鍵
- EIの後天的獲得可能性の高さ
- EIを通じた社会的可動性(EIで人生は変わる)
「EIとは“successful person”の要件」
- EIやEQは平等主義的思潮にも後押しされて、一気に人口に膾炙→殊に欧米における隆盛
- 学術的研究もさることながら、時に「EIビジネス」と揶揄されるほど職業領域での応用が盛ん
- EIと「非認知」なるものは実質的にほぼ同じ
- が、日本での教育界での注目は今ひとつ

47

47

生涯発達の土台としての「非認知」

—「非認知」的な心 ≡ EI ≡ 自己と社会性の力—

48

48



Heckman, J. J. (2013) Giving kids a fair chance. The MIT Press.

ジェームズ・ヘックマン(労働・教育経済学: 2000年ノーベル経済学賞)

- ・子どもに対する教育投資効果→乳幼児期への投資が最も効果的
- ・就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の子育て・保育の質
- ・乳幼児期への投資は大人になってからの15~17%の利益還元に通じる
- ・ベリ-就学前計画: 乳幼児期の保育が40,50歳時の経済状態・幸福を分ける
- ・特に恵まれない環境にある子にとって乳幼児期の保育はきわめて重要
- ・それは「認知」以上に「非認知」能力を促すことを通して生涯発達に影響

◇家庭外の安定した大人との関係→「非認知」=自己と社会性の発達を補償⁴⁹

49

自己と社会性の力≡「非認知」

- 「自己」に関わる心の性質 (基盤としての自己信頼)
(自分を大切に、適切にコントロールし、もっと高めようとする力)
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・「意欲/内発的動機付け」
「自己効力感」・「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「社会性」に関わる心の性質(基盤としての他者信頼)
(集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力)
「心の理解能力」・「コミュニケーション力」・「共感性/思いやり」
「協調性/協同性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の制御・調節」
(異時点間選択のジレンマ / 自他間選択のジレンマ 解決)

50

50

●子どもの発達と教育をめぐる世界的動向

(発達心理学・小児科学・幼児教育学・教育経済学・OECD諸国の教育政策……)

- 見直されつつある「子ども期」の重要性
- 生涯発達の基礎工事: 高度な学校教育も確かな「土台」の上に積み上げられてこそ益をなす
- 見直されつつある「非認知」の大切さ
- Well-beingに至る基礎工事+「認知」「学力」も「非認知」の支えがあってこそ確実に伸張する
- 「非認知」の中核→自己と社会性の心の力
- それを育む揺りかごとしてのアタッチメント

51

51

- マッシュマロ・テスト: ウォルター・ミシェル 1970年~追跡調査
- 幼稚園4歳児を対象
- 「1個、すぐに食べてもいいけど、15分待っていられたら2個あげるね」
- 1/3が待って2個もらう→その後の学業成績や社会的成功を長期的に予測
- 幼児期の「IQ」(認知)以上に「自制心」(非認知)が重要
- 「異時点間の選択のジレンマ」(アリとキリギリス) / 「自他間の選択のジレンマ」
- それは社会性にも強く影響をもたらす: 自己利益中心にばかり行動すると仲間の信用を失って長期的には集団の中で幸せになれない(「将来の影」)

52

52

- OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」
“Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills”
- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は“robust”: その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」=「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「長期的目標の達成」/「他者との協働」/「感情の管理」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性
→ “Starting Strong” 「人生の始まりこそ力強く」

53

53

● 「非認知」的な心の大切さ

- 世界各地で展開される長期縦断研究→発達早期に基盤形成される「非認知的な心」とそれを支え促すアタッチメントを核とする高質なケアの枢要な役割を示唆
- 「非認知」的な心=社会情緒的スキル=自己と社会性の力
→経済的安定性なども含めた生涯に亘る心身の健全・適応性やWell-beingを予測
→貧困から被り得る様々な悪影響に対するバッファー
- シンギュラリティが迫る中、AIが崩せない最後の牙城
- 「非認知」的な心→主に感情の当事者である際の子どもへの周囲の大人の関わりと、子どもの自発的な遊び/学び(一人遊び・集団遊び)の中で醸成される

54

54

Education 2030 (OECD)

『“vuca”な世界を生き抜く力』

Volatility (激動)
Uncertainty (不確実)
Complexity (複雑)
Ambiguity (曖昧)

Agency (責任主体性)/Co-agency (共同主体性)
[自己に関わる力] / [社会性に関わる力]

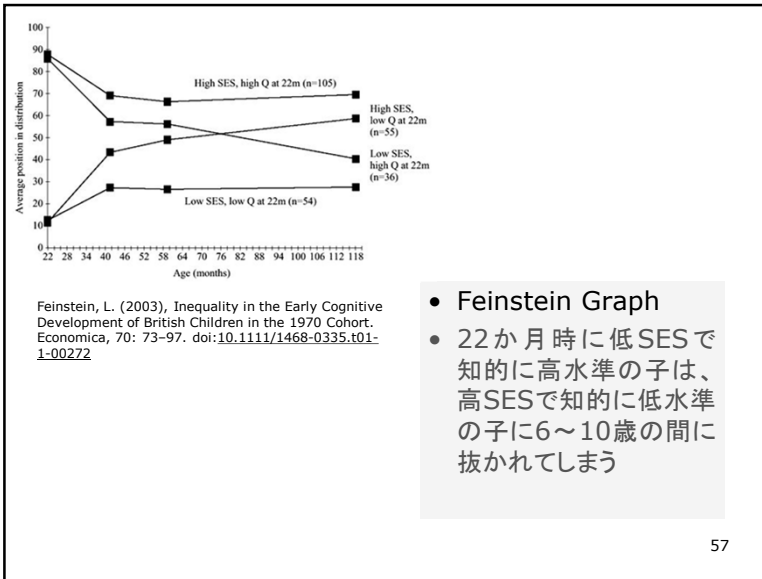
55

55

- 欧米圏中心に貧困層の子どもに対する様々な教育支援がなされ、その効果検証もなされている
- しかし、単なる経済支援や学生向けの融資プログラムは中退の抑止にはほとんどつながらない
- “Upward Bound Program”の失敗
- 相対的にIQが高く早期段階の成績も優秀な子どもが、経済的困窮以外の理由で卒業できない
→感情制御・self-control等=「非認知」の不足
- 逆に貧困層の子どもにおける幼少期の非認知的な心の育ちは、その後の成績低下に歯止めをかける可能性あり(英国縦断研究/箕面市調査)

56

56



57

- 子ども貧困の重い枷
- 時代推移→社会的流動性の狭まり(格差の増大)
- バッファーとしての睡眠等の生活習慣、読み聞かせ、温かい関係性・感情的風土、親と子どもの教育アスピレーションの高さ、学校等の周囲からの支援など
- 胎内環境の重要性(胎児プログラミング:DOHaD仮説)
-

- 大阪府箕面市データ
- 貧困状態にある子どもの学力が10歳を境に急激に低下
- 一方で家庭の生活習慣と子どもの「非認知」がバッファーになる

58

非認知 ≡ EI の揺籃たる
アタッチメント

59

生涯発達の鍵となるアタッチメント

- 子どもは容易に怖がる・不安がる存在
- そして泣きながら身近な誰かにくっつくとする
- くっついて安全感・安心感に浸ろうとする

＝ アタッチメント

単なるスキンシップ(皮膚接触)とは異なる

- 一日に何回も繰り返される至極当たり前のこと
- しかし、これがいかに確実に安定して経験できるかが、生涯に亘る心身の健康な発達の鍵になる

60

Bowlby, J.

- 不適応児・施設児への心理治療/戦争孤児研究
→「母性的養育の剥奪」(cf. ホスピタリズム)
- 二次的動因説(おっぱいを求めてくっつく)の否定
→一次的欲求としてのアタッチメント
(何かのためにではなくくっつきたいからくっつく)
- アタッチメント理論
→早期経験と関係性・パーソナリティの生涯発達

61

61

“Attachment and Loss”

「母子関係」の理論ではない／子ども限定の考え方ではない
『多様な親密な他者との関係性が人の生涯発達を支え促す』
『そして、その喪失は時に人の心身の適応性を脅かす』

62

62

- *Attachment* = 何らかの危急時あるいは危機が予期された時に生じる恐れや不安等のネガティブな情動を、特定他者への近接性の確保を通して制御・調整しようとする行為傾向(→心理行動/神経生理的制御機構)
- 一者の情動の崩れを二者の関係性によって制御
外界と内界の間にあって「緩衝帯」として機能
→ 特定他者への近接を通じた「安心感」の回復・維持
→ 保護してもらえることへの確かな「見通し」
→ 「見通し」に支えられての自発的「探索」
→ 「一人でいられる能力」=自律性の獲得・拡張

「安心感の輪」(circle of security)

63

63

アタッチメント理論→「A/E理論」

Attachment / Exploration

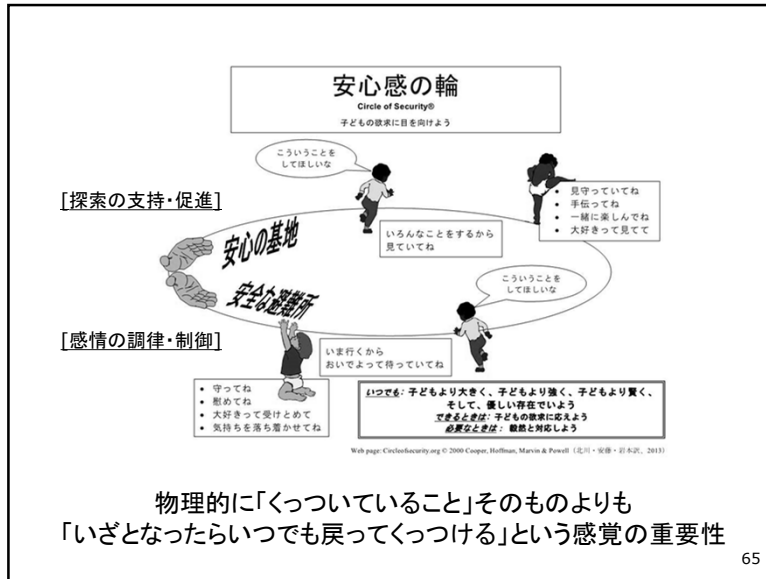
(アタッチメント)

(探索)

『安全な避難所』 / 『安心の基地』

64

64



65

アタッチメントと『安心感の輪』

- 大人は子どもの「安全な避難所」/「安心の基地」
 - 怖くて不安なものとの遭遇
 - ネガティブな感情経験(恐れ・不安・欲求不満等)
 - 「安全な避難所」への近接(くつき)
 - ネガティブな感情の調節 / 安心感 / 情緒的燃料補給
 - 「安心の基地」からの探索・冒険・自発的遊び
 - また怖くて不安なものとの遭遇…
- 子どもの日常はこの繰り返し→『安心感の輪』
- この輪がいかにか自然にかつ確実に機能し得るか
 - 子どもの健やかな心身の発達のカギ
- 子どもの成長＝徐々にこの輪を広げること
「一人でいられる力・時間」の拡張

66

- ・ 「安全な避難所」としての大人の役割
 - ・ 崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止め、それを大人が「鏡」になって(表情や言葉を通して)映し出してあげる
 - 心の理解能力・共感性・思いやり…
 - ・ 崩れた感情を立て直し、安心感を回復させる
 - 自分や他者への基本的信頼
「自分には愛してもらえる価値がある」「他人は信じていい」
 - 自律性・心のたくましさ
「何かあったらあそこに行けばいい」という見通しに支えられた自発的な探索や冒険・新しいものへの挑戦

67

アタッチメントと心理的発達

アタッチメントの二重過程

- ・ 感情の制御・立て直し
子どもの崩れた情動をなだめ、回復させる
→ 自他への基本的信頼・自律性・レジリエンス等
- ・ 感情の調律・映し出し
子どもの情動に寄り添い、映し出してあげる
→ 心的理解・共感性・自己概念・自己意識等

68

基本的信頼感と自律性・レジリエンス

- 特定の他者に対する近接を通して、安心感を回復・維持し、他者は基本的に誰でも自分を確実に保護してくれる、自分は確実に保護してもらえ、愛してもらえという基本的信頼感＝「愛の理論」(内的作業モデル)を得る
- 子は探索する中で自然に適度なネガティブ情動を経験→自ら何とかしたいと思い、能動的にシグナルを送ることで他者を動かし情動を立て直す→それが自分にはできるという自信)→自律性・自己効力感・レジリエンス

69

69

メンタライゼーション・共感性・自己意識等

- 大人は、子どもの情動をただ立て直すだけでなく、自らが「社会的な鏡」となり(つい子どもと同じような表情や声の調子になるなどして)、子どもの様々な心的状態に調律し、それを映し出す
- ミラーニューロンの関与?
- また、子どもの心身状態に合致した発話を伴わせる→子どもは自身の心身状態に適切なラベルを貼りつけ、理解→さらに今度はそれを他者にもあてはめることで他者の心も理解
- 自身が共感され受容され映し出される中で心的理解や共感性や自己意識・概念などが発達する

70

70

・「安心の基地」としての大人の役割

- ・ 安心感を得て、元気になった子どもを自分のところに留めておくのではなく、その背中を押して、また一人で探索や冒険に向かって行けるように応援し、離れたところから見まもってあげる
 - 自発性や主体性・意欲や内発的動機づけ・自己効力感・・・
 - 自律的・自発的な発見・探索を通した「学び」

71

71

Autonomy / Relatedness

(1人でいること) / (2人でいること)

- 「1人でいること」と「2人でいること」は物理的には両立し得ないが、それらが心理的に表裏一体の関係性をなしている状態こそが「安定したアタッチメント」
- 「自分には、何かあった時に必ず戻れるところ(避難所)がある」、「何か思い立った時に応援してもらえるところ(基地)がある」という確かな主観的感覚
- 人は「何かあった時にはまた必ず2人になれる」という高度な見通しに支えられて「1人で自律的にいられる」
- 特別なことをいっぱいしてあげることよりも、大人が常に「避難所」「基地」としてあり続けることの重要性

72

72

- アタッチメントとは恐怖管理・安全確保のための心身の仕組み(危機に際して特定他者に「くっつく」ことを通して定常状態に戻ろうとする)
- 緊急反応状態(恐れ・不安)から平常状態への回復(ホメオスタシス)を可能にする中で、脳神経も含めた心身の健康な発達が支え・促される
- 恐れ・不安時に特定他者に確実にくっつける経験を基に、その他者は「避難所・基地」化し、危急の際には、そこに近接できるという見通しに支えられて、子どもは高度に自律的になり得る

73

73

学校・教室の中における

アタッチメント

安全感・安心感の基盤を形成する

「非認知」の心の力→自ら「感情の当事者」として在る時に(オンラインで)ケアを受ける中で育まれる。当時者性の薄いオフライン型の教育では、ごく表面的な知識やスキルの獲得に止まる可能性が大きい。

子どもの「子ども染みた」感情に対して
周囲の大人がいかに真摯に向き合えるか！

74

74

- 授業による教育効果をより向上させるために感情面の何に配慮すべきなのか？
- 児童生徒の感情経験の質・well-being
- 児童生徒の「非認知」コンピテンス
- クラスや学校の「感情風土」(関係性含む)
- 教師・クラス・学校の「基地」「避難所」機能
→安心感・探索意欲の基盤形成
- 教師の感情経験・表出・メンタルヘルス etc.

75

75

「非認知」≡EIの発達を支え促す教師の役割

- アタッチメントの対象(随伴的な応答者)
基地・避難所として子の感情を調律 / 制御する
- オープンな感情風土の醸成者
温かな関係性・感情風土を醸成する(←教師自身の心の健康)
- 感情のコーチ (Emotion Talk)
感情の聞き役・語り部・指南役となる
- モデリング/社会的参照の支持促進者
自ら「非認知的な心」のモデル/参照枠となる
- 子ども同士の遊び/学びの見護り役
「黒子」「応援団」として楽しい遊び/学びを支え促す

etc.
76

76